

# 鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

第五回

## 第五章 住友入社

1

近江商人おうみという言葉がある。貞剛ていこうの故郷である近江国の商人のことである。

彼らは、日本全国に営業拠点を設けて商業活動に従事した。その子孫は現在に至るまで経済界で重きをなしている。

なぜこのように一地方の出身者が商業分野で活躍するようになったのか。考えられる理由は、近江国が東海道、中山道、北陸道の陸上運送、そして琵琶湖びわこの水上運送かなめの要の地であったこと。これらに

よって東北や北海道（蝦夷地）につながる物流拠点になりえた。

また昔からこの地では多くの市が立ち、特に織田信長が開いた楽市楽座から有数の商業地として発展した。

さらに近江国には、貞剛の生まれた西宿や四天流剣術を習った八幡などのように天領や飛び地、旗本領などが多く混在し、それぞれの経済規模は小さく、農民たちは外に出て収入を得る必要があった。そのため、早くから行商が盛んになったものと思われる。

近江商人の代表格である中村家には「三方よし」の家訓がある。

これは近江国五箇荘の商人中村治兵衛宗岸が残したものだ

「売り手よし、買い手よし、世間よし」でよく知られている。

他国で商売をする近江商人は、その地に受け容れられなくてはならない。

そのためすべての利益を独り占めにすることなく、その地の利益になるように努め、私利をむさぼることがあってはならないと常に自戒していた。その精神が「三方よし」という言葉に集約されているのだ。

貞剛が赴任した函館は近江商人が活躍していた。彼らは十六世紀、慶長年間から北海道の産物である昆布、干鱈、鯨などを本州へ運び、本州の産物である衣類その他生活物資を北海道に運ぶという、往復で稼ぐノコギリ商法で莫大な利益を上げ、確固たる地歩を築い

ていたのである。

北海道を治める松前藩は、一七三七年（元文二年）げんぶんに近江商人の集まりである両浜組を藩の公認団体とし、多くの特権を与えていた。

明治時代になっても商業並びにロシアなど海外貿易の拠点として函館の重要性は高かった。そこで明治政府は、他府県に先駆けて函館に裁判所を設置した。外国人との訴訟事件などを裁く必要性があったためである。

貞剛に函館赴任を命じたのは、江藤新平から司法卿を引き継ぎ、江藤と同じく佐賀出身の大木喬任おおき たかとうである。

「君のことは江藤から聞いている。なかなか骨のある人物だと評判だ。ところで近江の出身らしいな。函館は近江商人の活躍する街だ。ぜひ君の活躍を期待している」

大木は、赴任に当たって貞剛に言った。

「函館は、政府にとっても重要な拠点と聞いております。頑張ってご期待に沿いたいと思っております」

函館は榎本武揚たち旧幕府軍が最後まで新政府に抵抗した地である。まだ火薬や血の匂いが残っていると云っても過言ではない。住民の中には明治政府よりも旧幕府に親近感を感じている者も多い。新政府の官僚として赴任する者には、それなりの覚悟が必要だった。

貞剛は、大木に強気の決意を語ったものの、赴任した途端に函館

の寒さにたじろいだ。頬を冷気が刺すのだ。

当初、生活に慣れるまで単身で赴任する気だったが、妻まつ子は家族揃って赴任すると言つてきかない。

しかたなくまつ子と娘はる子連れて赴任したのだが、すぐに後悔する事態となった。

まつ子の死である。まつ子は、赴任早々、寒さから体調を崩し、そのまま帰らぬ人となってしまった。

貞剛は、嘆いた。一人で赴任すべきだったと後悔してもまつ子は帰つてこない。娘はる子を傍そばに置くわけにはいかず、遠く離れた近江国西宿の母田鶴たづに預けることにした。

北海道の寒さは本当に厳しい。近江国でも冬に琵琶湖から吹く風は身を切る寒さがあるが、それとは比較にならない。

なによりも雪が多い。自分の背丈以上に雪が降り積もる。

雪道は、寒さばかりでなく寂しさも一入ひとしおになる。裁判所から馬車で官舎まで帰るのだが、門の前で下車し、少しの間、雪道を歩いてから玄関まで行き着く。

妻はいない。娘は故郷の母のもとだ。誰も待っていない寒々しい官舎に向かう。ザクツ、ザクツと雪を踏みしめる音が、自分の後から追いかけてくる。振り向くと誰もいない。孤独が足下から上つてきて体の芯まで凍らせる。

——左遷させんされたのではないか。

暗い雪道を歩いていると、ふと貞剛は、後ろ向きな考えに囚とらわれることがある。

西川吉輔よしすけや江藤の考えに影響され、この国に法の統治を浸透させる役割を担おうと決意し、司法官という役割に自分の道を見出すことができると思つて、函館へ来た。

貞剛は器用な役人生活を送っているわけではない。誰にも媚こびを売らない。権勢を誇る薩摩や長州出身者に引き立ててもらおうというような働きかけもしない。ひたすら職務に励むだけだ。

——大木司法卿は、函館の地は近江商人の勢力が強いから、君は適任だと思つと言われたが……。

しかし聞くところによると、極寒の北海道に行きたいという司法官は少なかつたという。中には上手うまく断つた者さえいると聞く。自分はなは端から断るような性格ではないと見抜かれたのではないか。

官舎に入る。一人暮らしには広すぎる。一人で火鉢の火を熾おこす。部屋はすぐには暖かくなならない。酒を飲まない貞剛は、湯を沸かし、茶を淹いれ、なんとか体を温める。

所長の井上好武よしたけは誠実で真面目な人物だ。妻を亡くし、娘を故郷に託しているという貞剛の置かれている状況に同情してくれている。その意味で居心地は悪くない。

——東京の司法省でも、郷里に近い裁判所への転任を考えておく  
と約束してくれているが、どうなることやら。

貞剛は、帰郷の際、東京の本省にそれとなく郷里の近くに勤務地  
を変えてくれるように頼んでいたのである。

老いた両親や娘のことが気がかりだからだ。

本省の人事課は、なんとかすると期待を持たせてくれているが、  
適当な後任がいらないとの理由で、一年も待たされている。いい加減  
な約束をするものだ、と正直腹が立つ。

貞剛は、司法少検事から司法権中検事に昇進したが、なんだか昇  
進でごまかされている気がした。

——このような沈んだ気持ちの時、吉輔先生ならどのように指導  
してくださいさるだろうか。

「随処なに主と作る」

吉輔が不遇の際、『臨濟録りんざいりく』のこの言葉を胸むねに刻みつけて来るべ  
き時を待っていたと聞いたことがある。

その場その場で主人公となれ、そうすれば自分のいる場所が真実  
の場所になるという意味だろう。

貞剛が免許皆伝めんきょいかいでんとなった四天流剣術は居合だ。一瞬一瞬が勝負で  
あり、命を懸ける剣術だ。

この臨濟の言葉にも通じるものがある気がする。とにかく今の場

所を死に場所と思い定めて職務に励むしかない。

ようやく部屋が暖かくなってきた。眠るとするか……。

2

「た、大変です」

函館警察の巡査が、検事室で執務をする貞剛のもとに転がるように飛び込んできた。

貞剛は、椅子を蹴って立ち上がった。

ロシア人貿易商と地元海産物問屋との民事訴訟の案件の調書を記していたのだが、その場で筆をおいた。

「いかがでしたか」

貞剛は険しい表情で聞く。

巡査の様子が、尋常ではない事件が発生したことを物語っている。

「殺されました」

「誰がだ！」

「ドイツ代弁領事のハーバーです」

巡査が息を切らす。

「すぐ参る。案内してくれ」

貞剛は巡査に案内をさせ、すぐに現場に駆け付けた。

一八七四年（明治七年）八月十一日のことだった。

例年になく暑い北の国の夏がようやく過ぎようとしていた。午後六時過ぎ。まだ陽は沈んではいないが、肌に当たる風にはわずかにひんやりとしたものを感じるようになっていた。

貞剛が現場の函館区谷地頭道やちがしらに駆け付けると、警官が大勢集まり、物々しさを溢れている。

「伊庭検事いばがご到着されました」

警官らがさつと左右に分かれると、貞剛の前に地面に横たわる男が現れた。

「ドイツ代弁領事のルードヴィツヒ・ハーバー殿に間違いないか」

貞剛は、現場検証に当たっている巡査に聞いた。

「間違いございません」

巡査は深刻な表情で答えた。

「うむっ」

貞剛は、思わず生唾なまつばを飲み込んだ。

——これは大変なことになる。

国内の排外的な攘夷気運じやういが原因で、幕末から明治にかけて外国人が危害を加えられる事件が多発し、いずれも国際問題となっていたからだ。

殺害されたのは、三十一歳の若い代弁領事。傷口は二十数か所に



及ぶ無惨なものであった。

左の下顎から上腕、そして頭部にかけて深く斬られている。耳は辛うじて頭部側面についているような状態だ。切り口から見て凶器は日本刀であることは間違いない。

「すぐに捜査を開始し、函館港に停泊中の船舶の出航を止めるんだ」

貞剛は巡査に命じた。

犯人が船で逃走を図るかもしれないからだ。

貞剛は、組織的な攘夷行動でないことを祈った。そして何があっても外国の介入を抑え、我が国の法律で裁かなくてはならないと覚悟したのである。

### 3

犯人はほどなく交番（邏卒屯所）に自首してきた。

犯人は、旧秋田藩士の田崎秀親、二十二歳。

貞剛が取り調べに当たる。問題は、単独犯か組織犯かである。組織犯なら事態は容易ならざることになる。

田崎は、尊王攘夷の思想に取り憑かれた下級士族で「外国と親和条約を結んだ頃から、我が国体は衰頹の一途でござる」と憤懣を貞剛にぶつける。

田崎は、誰でもいいから外国人を殺害しようと考え、函館にやってきた。街を徘徊し、招魂神社辺りでステッキを手にして散歩する外国人に出会った。

ハーバーである。絶好の機会と思い、追跡し、持っていた傘を投げつけ、ハーバーが振り向いた時、肩先めがけて斬りつけた。ハーバーは近くの農家へ逃げ込み、手を合わせ、田崎に向かって命乞いをしたが、田崎は頭をめがけて攻撃した。しかしなかなか絶命しなかったため、何度も何度も斬りつけた……。

「なんという残酷なことをしたのだ。極刑は免れぬぞ」

貞剛は田崎に言う。

「もとより覚悟の上でござる。函館に来た際、天照大神が夢枕に立たれ、外国人が皇室を廃止しようと企んでいる。よって速やかに殺せとの神託を受け申した」

田崎は陶酔したような目で言う。

「仲間はいるのか？」

貞剛が聞く。

「おりませぬ。私一人の決心です」

田崎は睨みつけるようにして貞剛を見た。

「外ではお前を引き渡せと、ドイツを始め、各国の領事が騒ぎ出している。港にもイギリス艦隊やドイツの軍艦が入港してきている。

皆、お前を引き渡して、八つ裂きにせんと勢い込んでいる。函館の人々は、戦争になるのではないかと恐れ慄おのいている。東京では大木司法卿がドイツ公使に謝罪をした。どれほど重大なことをしたのか分かっていいのか」

貞剛が諭す。

「引き渡せばいいではないか。望むところだ」

憎々しげに言い切る。

「だめだ。お前は日本人だ。日本の法律で裁く。それが真の国体というものだ」

貞剛の強い言葉に、田崎が項垂うなだれる。

貞剛は、その後、ハーバーが逃げ込んだ農家の住民、田崎が宿泊した旅館、凶行前夜に一夜を共にした娼婦、函館行に利用した船の船頭など、田崎の供述に基づいて取り調べた。結果は、誰一人、田崎と共謀したと疑われる者はいなかった。狂信的な尊王攘夷思想による単独犯という結論に達した。

貞剛は、田崎に一片の哀れみを覚えた。

時代が変化しつつあることを全く自覚せず、外国人の往来が、国体を衰頹たいへんさせていると思ひ込んで凶行だったからだ。

数年前までは、尊王攘夷の武士たちが暴れまわり、外国人や攘夷に反対する者を攻撃していた。しかし、今は、西洋文明を早期に採

り入れようと躍起になっている。五箇条のご誓文せいもんの中にも「智識を世界に求め大いに皇基しんきを振起すべし」とあるではないか。

田崎は時代について行けなかった。ある面では時代の犠牲者とも言えるだろう。

しかし田崎が殺害したハーバーはもつと気の毒だ。聞くところによると、病氣療養中であつたらしい。代弁領事かたわの傍ら函館で貿易のビジネスを開始する機会をうかがっていた。そのために遠くドイツから日本にやってきたのだ。それなのに思いもかけず無惨な最期を迎えることになった。手を合わせ、命乞いをする際、彼の目には何が見えたことだろう。故郷の父母の姿であろうか。貞剛は、遠く近江に離れて暮らしている父母や娘のことを思い、ハーバーに深く同情した。

貞剛の求刑は、斬罪すなわ、則ち死刑である。

田崎は同年九月二十六日午前十時、函館囚獄場処刑場で、イギリス兼ドイツ領事、アメリカ領事、デンマーク領事立ち会いの下、斬首された。

その様子を伝える記事によると、首討ち役人が二人がかりでも上手く首が落ちず、とうとう最後には役人が田崎の頭髪を握り、頭を持ち上げ、のこぎりのように刀を動かして首を落としたという。

非常に残酷で、目を背そむけんばかりの有様だった。しかし立会人た

ちは「ハーバーの無念を晴らすのに相応ふさわしい処刑である」と口にし、満足げに処刑場を後にしたのである。

4

貞剛は、順調に昇進した。一八七四年（明治七年）十月には権少判事、十一月には正七位にも叙せられた。翌一八七五年（明治八年）には函館裁判所副判事にも任ぜられた。

しかし一向に、郷里に近い裁判所への転任が叶わない。職務は忠実に務めている。貞剛は、生来、自分の処遇に不満を抱くタイプではない。それでも一度、本省の人事課に転任の願いを申し出て、それを了解しておきながら放置していることが許せなくなってきた。

裁判所の上司に催促しても、本省の方で後任を見つけようとしているが、適当な人材がないと、その場を繕つくろう返事をするだけだ。

貞剛は、司法が国を造ると思い、司法官の道に進んだが、徐々に憤懣が募ってきた。

自分の運命を自分で決められない官僚生活が息苦しくなってきたのである。吉輔に乞われて死を覚悟して京に上った頃の燃えるような情熱が、政府の秩序が整備されていくにしたがって失われていく気がする。

このままではいけないと思う。それに加えて官僚の事なかれ主義にも嫌気がさしていた。何事も、無事ぶじこれいば是名馬とばかりに見て見ぬ振りをする。眠っているかのように書類を作成するだけの同僚や上司たちを見ていると、あのようにはなりたくないと思ふと血が騒ぐ。

また官僚は、やたらと庶民に対して居丈高いたけだかなのも気に食わない。貞剛は畑の畦道あぜみちを歩く老婆に道を譲るといったように、当時の武士や代官の息子といった身分からは考えられないような謙虚な振る舞いをする人間だ。

当然、罪人であろうと、またいろいろな問題を訴えかけてくる農民や商人に対してもよく話を聞き、心を込めた対応を心掛けていた。ところが同僚や上司たちは、「何を面倒はなことを訴えてくるのだ」とばかりに彼らを撥ねつける。

その度に貞剛は彼らの前に出て、「何か問題があるのか」と問いかけるようになった。

農民たちからすれば仏のような存在だが、同僚たちからすれば、面倒なことを増やす存在ということになる。

妻を亡くし、娘も遠く郷里に預けていけば、やることは仕事しかない。たとえ同僚から、どのように思われようともかまわない。

一所懸命の言葉通り、その日、その場の職務を果たすべく日々を過ごしているが、このまま官僚として一生を終えていいものか、も

つと自由に羽ばたくべきではないのか、という疑念がふいに頭をもたげてくる。

——品川殿は如何いかがされているかな。

時折、品川弥二郎やじろうの明るい笑顔を思い出す。彼は長州人であり、政府の中心派閥の中にいる。英国やドイツに留学させてもらっていると風の便りに聞こえてくる。

羨うらやむわけではないが、貞剛は、政府の人事は理不尽であると思っ  
ている。薩摩藩や長州藩出身者の優遇が目立ちすぎる。能力ではな  
く、たまたまその藩に生まれたというだけで差がつくのは許せない  
という気になる。

同僚の中にも薩摩、長州の出身であるとか、関係が深いことを露骨に自慢し、自らの榮進きゆうしんの道に汲々きゅうきゅうとしている者がいる。

貞剛にとってそういう類たぐいの者たちは、論語で言う斗筭とそうの人である。弟子の子貢しこうが孔子こうしに、今の政治家についての評価を聞いた。すると孔子は、「噫あゝ、斗筭の人なり、なんぞ算ずるに足るや」と嘆いたのだ。つまり、ひと柵ますいくらでしか計れないような連中のことだ。函館という地方の官僚の規律が緩み、歪ゆがむのは中央政界、官界にも原因がある。

——よもや品川殿はそういうことはないだろうが……。

貞剛の耳に入ってくるのは、中央政界、官界で薩摩閥、長州閥の

専横に起因する汚職の噂だ。特に品川が属する長州閥がひどい。

やまがたありとも

かおる

やましろや わすけ

み

山県有朋や井上馨など長州閥の中心人物が、山城屋和助事件、三

たにさんくろう

おさりざわ

ゆちやく

谷三九郎事件、尾去沢銅山事件、小野組転籍事件など商人と癒着

した汚職事件を次々と引き起こしている。

彼らは、自分の財を築くために明治維新を成し遂げたのかと、貞

剛でなくとも多くの庶民が憤懣を抱いているだろう。

いだ

——江藤殿も中央政界から下野され、乱を起こして斬罪となってしまった……。

げや

江藤新平は朝鮮を解放するという征韓論を大久保利通らと戦わ

としまち

せたが、敗れ、参議を辞して西郷隆盛らと下野した。明治六年の政変と言われる一大事件である。

その後、出身地の佐賀に戻り、一八七四年（明治七年）二月に同

地で決起した。佐賀の乱である。しかし同年四月には政府軍に鎮圧された。

——江藤殿は、裁判を受けられずに罪人として首を切られ、その首を晒されてしまわれた……。

ひた

貞剛は、江藤の爽やかな笑顔を思い浮かべ、その無念さと思うと涙を禁じえなかった。

——江藤殿は征韓論に敗れて下野されたのではない。腐敗し、汚職が横行する政界、官界を正し、法の支配を徹底しようとされたの



だ。そのために長州閥や薩摩閥は謀略の限りを尽くして江藤殿を追放したのだろう。

乱を起こされたのも、地元の純粹に国を憂<sup>うれ</sup>うる若い士族たちに担がれてしまわれたからだ。

それにつけても返す返すも無念なのは、法の支配を最も強く主張されていた江藤殿が、まともな裁判を受けずに斬罪にされたことだ。こんなことでいいのだろうか。

貞剛は、尊敬する江藤の死のこともあり、急速に官途に対する熱意を失いつつあった。

これではいけないと思うのだが、どうしようもない。自分の生きる道、自分を生かす道は、官ではないのではないか。

国家を蚕食<sup>さんしょく</sup>するような官の状況を自分では如何<sup>いかん</sup>ともしがたいのが、悔しいというか、焦心をかきたてられる。

——三十にして立つ……。

もうすぐ三十歳になる。孔子も三十歳で自分の道を決めたという。自分も孔子にあやかるときではないか。

ついに貞剛の思いが爆発する。貞剛は、公用で上京した際、大木司法卿に面会を求める。

一八七五年（明治八年）十月のことだ。

函館裁判所の副判事が、本省のトップに面会を求めるのは異例で

ある。

しかし大木は、自分を函館に派遣した張本人であるし、なによりも自分に法の重要性を説いた江藤と同じ佐賀の出身であり、司法省における江藤の後任でもある。

ただし江藤が起こした佐賀の乱では、叛徒を裁く側に立たねばならなかった。薩摩や長州が叛徒を裁けば、遺恨が残ると考えた政府の巧妙な策だといえるだろう。

「大木様、私は不平を申し上げようとここに来ております」

貞剛は、挨拶もそこそこに大木に向かって言い放った。

若気の至りという言葉があるが、貞剛の憤懣がほとばしり出てしまったということだろう。

「いきなりどうしたのだね。不平があるなら、拙宅せったくに來なさい。そこで話そう」

大木は大様おおように構える。

貞剛は、端から攻撃的だ。常に礼節を失わないようにと努めてきたのに珍しい。大木の背後に江藤の姿を見ていたのかもしれない。「不平は公然と申し上げないといけません。公然と申し上げられない不平は真の不平ではありません。私に司法官の道を説いてくださった江藤殿も、誰もが真の不平を国家や政府に具申できるように司法制度を整えようとされました」

貞剛が江藤の名を出すと、大木の表情が歪んだ。苦しげだった。自分の手で裁かざるを得なかったことを悔やんでいるのだろう。

「では、ここで聞くことにする」

大木は、椅子に腰かけた。貞剛は立ったままだ。

「それでは申し上げます」

貞剛はひと息入れ、「士を遇するに道をもつてなすということがございます。またその言は訥とつであるべきで、軽々しく口から出すものではありません」と強い口調で話し始めた。

貞剛は、郷里に老いた父母と娘を残したままであること、以前から郷里に近い裁判所に転勤の願いを出していること、それに関して上司は対処すると約束しながら、適当な後任がないという理由で、一向に実現しないことなどを一気に話した。

「地方の裁判所の人事であるとして、ないがしろにされますのはあまりの不公平というものであります」

貞剛は、大木を睨みつけたまま、言い切った。

身の程知らずの無礼者だとの誹りそしを受ければ、その時はその時だ、と覚悟を決めていた。まるで四天流剣術の居合剣を抜いたようだ。

「わかった。伊庭君、来年の三月まで待ってくれ。私が責任をもつて転任させる。武士に二言はない」

大木は、貞剛の気迫に押されながら答えた。

「ありがとうございます。失礼なことを申し上げました。お許しください」

貞剛が低頭する。

「気にしないでよろしい。組織と言うのは、いったん出来上がると硬直化し、言いたいことも言えなくなるものだ。昔から諫言は一番槍より難しいと言うのではないか。よくぞ勇気を奮<sup>ふる</sup>って言ってくれた。礼を言うのは私の方だ」

家康の言葉にある、「主君への諫言は一番槍に勝る」を引用して、大木は貞剛を褒めた。

「君のような人材は、これから官に必要だ。主要な役割を担ってもらいたいから、軽々なことは考えないでくれよ」

大木は言った。

「これで失礼いたします」

大木が官に留まるようにと諭<sup>さと</sup>していることを十分に理解していたが、貞剛は言質<sup>げんち</sup>を与えず、再び低頭した。

「おおそうだ、伊庭君」

部屋を辞そうとする貞剛を大木が呼び止めた。

「なんででしょうか」

貞剛が聞く。

「君は、再婚しないのかね。いつまでも一人でいると、仕事に差し

支えないとも限らない。いいお嬢さんがいるから紹介しようか」

大木は笑みを浮かべている。

「ご心配をおかけいたします。転任が叶いましたら、よく考えさせていただきます」

貞剛は微笑した。

「ははは、まずは希望のところ転任してもらおうことにする。期待して待っていてくれ」

大木は、貞剛のささやかな皮肉が通じたのか、愉快そうに声を出して笑った。

貞剛は、大木のおおらかさに触れ、今度は希望が叶うだろうと確信して、司法省を辞した。

貞剛も再婚を考えていなかった。まつ子を亡くした悲しみはまだ十分に癒えたとは言えないが、やはりやもめ暮らしは心身に悪影響する。

母田鶴からも度々、再婚の打診があった。

しかし仕事にかまけて、真剣に受け止めなかったが、大木が転任の希望を叶えてくれる可能性が高くなった今、真剣に再婚を考えてみることにした。

その旨を田鶴に手紙で相談すると、早速に一人の女性を紹介してきた。

旧彦根藩士松本義信の長女梅子という。

「年齢はまだ十七歳だけど、とてもしっかりされているという話だよ」

田鶴が熱心に勧める。

貞剛は、田鶴が良い娘というなら間違いはないだろうと、了承した。

同年十二月、貞剛は、梅子と内祝言うちしゆげんを挙げた。

祝言の席で初めて見る梅子は初々ういういしさに満ちていた。時折見せる恥じらいを秘めた表情に少女の面影が残る。

——北海道に同行して大丈夫だろうか。

貞剛は、梅子を函館ちゆうちよに同行することを躊躇した。先妻のまつ子のことがあるからだ。

今年の冬は一段と、函館の寒さや雪が厳しい。ただ寒いだけならまだ耐えられるかもしれない。しかし雪に閉ざされた暗い北国で、まったく知人もいない孤独にはよもや耐えられまい。

まつ子の二の舞になっては大変なことになる。

「私は三月には郷里に近い裁判所に転勤になるだろう。大木司法卿が約束をしてくださっているから間違いない。無理に私と一緒に函館に行かなくてもよいぞ」

貞剛は梅子に言った。

梅子は貞剛の話に、一瞬、怪訝けげんな表情を浮かべた。

しかしすぐに居住まいを正し、まっすぐに貞剛を見つめた。

「お気遣いは無用でございます。一旦、嫁した以上は、あなた様と労苦を共にするのが妻の務めです。函館へご同行いたします」

梅子は、きりりと引き締まった表情で言った。

貞剛は、たじろいだ。自分より腕が上の剣の達人に勝負を挑まれた時のように緊張もした。

貞剛は三十歳。梅子とは十三歳と、一回り以上の年齢差がある。

しかし梅子の気迫は、年の差を感じさせないものだった。

「分かった。では一緒に行こう。決して音ねを上げるなよ」

貞剛は、久しぶりに浮き立つような心地になった。

梅子の強さ、前向きさが、人事などの不満からやや後ろ向きな気持ちになつていた貞剛に刺激を与えたのである。

貞剛と梅子は、翌一八七六年（明治九年）に横浜港から乗船し、函館に向かった。海上には冬の嵐が吹き荒れていた。

「寒うごございますね」

梅子はデッキから白波が立つ海を眺めて、心細そうに呟いた。

「怖おそい気がしたか？」

貞剛は、にんまりと笑みを浮かべた。

「何のこれしき、でございます」

梅子が怒ったように貞剛を見つめた。

「ははは」貞剛は、声を出して笑った。

——この女性となら荒海も楽しくなりそうだ。

貞剛は、梅子の肩を優しく抱いた。

5

「住友に入る決心は、まだつかぬか」

叔父の広瀬<sup>ひろせ</sup>宰平は、貞剛と梅子の内祝言の席で言った。

「まだ官でやることはありません」

貞剛は、梅子を横に置き、言った。

「官に入って、もう七年になるではないか。なんとなく窮屈である  
と、その顔に書いてあるぞ」

宰平は、酒の勢いもあるのか、軽口をたたく。

貞剛は、心の底を見抜かれたような気がして、表情をごまかすよ  
うに右手で顎を撫でた。

「今、別子<sup>べっし</sup>銅山は、大改革の最中なのだ。ご一新の世になってます  
ます銅の需要は増え、海外にも輸出できるようになった。今までの  
ような旧態依然とした採掘では間に合わんだ。近代化を図ってい

る」



幸平は勢いよく語った。

自分の考えで、どんどん道を切り開いていく幸平を羨ましいと感じるところがあった。

官である限り、あくまで政府の都合で、まるで駒のように動かされる。大木に不平を言い、転勤させてもらったとしても行先まで自分で決められるわけではない。不自由さがどこまでも付きまとう。

「近代化ですか。それはまた大変なことです」

「フランスからラロックという技術者を雇ったのだ。月給いくらか知っているか？」

幸平の質問に貞剛は首を横に振る。

「月給六百円だぞ。はっはっは」

幸平は剛毅しつぎに笑った。

貞剛は、その厚遇に驚いた。自分の月給の六倍以上だからだ。幸平が別子銅山の近代化にかける意欲がその金額に表れていた。

「それはえらく高額ですね」

貞剛も笑顔になった。

「なあ、貞剛、住友に入ってお国に尽くすのも男の道だぞ。住友は三百年もの長きにわたってお国に尽くしている。徳川様の時代も、今の時代も……」

幸平は、貞剛の前に腰を据えて住友の歴史を語り始めた。

貞剛は梅子と共に、叔父宰平の話に耳を傾けることにした。

「住友の家祖は、越前丸岡藩に天正十三年（一五八五年）に生まれ  
た文殊院住友政友様だ……」

政友は涅槃宗の僧侶だったが、涅槃宗は他宗から妬まれ、排斥を受け、幕府の裁定により天台宗の一つの派となってしまった。

そこで政友は、員外沙門という立場になる。僧ではあるが、僧ではない、すなわちどの宗派にも属さない僧として、還俗し、一般社会の中で生活しながら涅槃宗の法灯を継承する道を選んだ。

「住友が他の商家と異にするのは、祖が宗教家だからだ」  
宰平はどこか誇らしげだ。

政友は、一六二八年（寛永五年）頃、京の上柳町で富士屋嘉休という薬と出版の店を開き、商売を始める。

「薬は人の体を、書物は人の心を癒やし、救う。共に人々の助けになる商いなのだ。宗教家である文殊院様は、商売を仏が衆生を救う道と心得ておられたのだろう。一方、京都には涅槃宗の有力な信者で政友の姉周栄と夫婦であった蘇我理右衛門様がおられた。この方が住友の業祖だ」

理右衛門は、一五七二年（元龜三年）に生まれ、一五九〇年（天正十八年）に京の寺町五条で銅吹き業、すなわち銅の精錬業を開業し、泉屋蘇我家を興す。

「理右衛門様の偉大なところは、お名前に理という文字があるように非常に科学的で、『南蛮吹き』という銀、銅の吹き分け技術を実用化されたのだ」

南蛮吹きというのは、理右衛門が一五九六年（慶長元年）に開発した精銅技術である。理右衛門は、ポルトガル人からヒントを得たと言われているが、当時としても世界的水準の技術だった。

南蛮吹きとは、三工程からなる。まず銀は鉛に吸収されやすい性質があるので、銀を含んだ銅と鉛の合金を造る。これを鉛の融点上、銅の融点以下で加熱すると、精銅と銀を含んだ鉛に分離する。銀を含んだ鉛合金は、今度は灰吹き炉で銀と鉛に分離され、銀が回収される。

灰吹き炉を使う灰吹き法は、古くから用いられている金、銀、鉛を分離する方法である。

金や銀を含んだ鉛合金を空気を送りながら八〇〇度から八五〇度に加熱すると、鉛は酸化鉛になり、金や銀と分離する。そこで残った金や銀を回収するのだ。これを灰吹き金、灰吹き銀と称した。

南蛮吹きのお陰で、それまで銅を取り出した後は廃棄せざるを得なかった鉛と銀の合金から、銀を取り出すことができるようになったのである。

「ところでなぜ理右衛門様は泉屋と称したか知っているか」

幸平が貞剛に聞く。貞剛は、存じ上げませんと答える。

「この泉というのは、『孟子』によると清冽せいれつな水がこんこんと湧き出でて尽きないという意味があり、お金のことも泉貨というほど、縁起のいい文字なのだよ。それで住友は菱井ひしいげた桁を紋にして、縁起のよい泉屋と称するようになったわけだ。文殊院様が宗教家でもあるから、お金ばかりでなく徳も湧き出でて尽きることがないだろう」  
幸平が得意そうな表情で言う。貞剛は愉快だった。気難しいと思っていた幸平が、住友のことになると、ここまで子供のように楽しんで話すからだ。

理右衛門には息子、友以とももちがいたが、彼は政友の娘、妙意の婿となり、泉屋住友家を興した。

彼が、理右衛門の南蛮吹きを引き継ぎ、銅吹き業の後継者となった。

一六三〇年（寛永七年）に本店を大坂淡路町に移した。銅吹き業の発展とともに材料の仕入れ、銅の販売などには大坂が適していたからである。

「その際、文殊院様からの助言もあり、南蛮吹きなんばんぶきの技術を独占せず他の人にも教えることとした。その結果、大坂は日本一の銅吹き業の街となったのだよ」

一方、文殊院政友には政以まさもちという息子がいた。彼の妻は涅槃宗の

熱心な信者であった幕臣岩井（永田）善右衛門ぜん えもんの娘で、亀といった。後の宝泉院春貞である。

「政以様は富士屋嘉休を順調に営んでおられたが、一六三八年（寛永十五年）、急死されてしまった。また不思議なことと言うべきか、不幸は続くと言うべきか、友以様の奥様である妙意様も亡くなられたのだ。そこで文殊院様は、政以様の妻であった亀様を友以様の後妻にされたのだ」

後妻という言葉に、貞剛の後妻となった梅子の表情がわずかに張り詰めた。貞剛が、梅子の手に自分の手をそっと重ねる。

そして友以が住友家の二代目となる。初代住友文殊院政友は一六五二年（慶安五年）八月十五日に六十八歳で没する。

「友以様は文殊院様の教えをよく守られ、銅吹き業は順調に発展したのだ。長堀に銅吹き所を開設したため大坂には銅吹き屋、銅問屋などが集まり、日本一の銅の街となったのだよ」

友以は五十二歳という若さで、一六六二年（寛文二年）に没する。

三代目友信とも のぶが後を継ぐと、江戸、長崎に支店を出し、岡山きんの吉岡銅山さちうや山形の幸生銅山さちうなど鉱山経営へと事業を拡大した。

彼は三十八歳で早々に引退し、息子友芳ともよしを四代目に指名、就任させた。

「この時、住友家に大きな変化が起きる」

幸平は目を輝かせた。

いつの間にか、幸平の周りには内祝言に來た親族が集まっていた。皆が、幸平の話に耳をそばだてている。

「それは元禄三年（一六九〇年）のことだった……」

幸平は、余程思い入れが深いのか、過去を懐かしむように目を細めた。

岡山の吉岡銅山支配人田向重右衛門からの書状が届く。そこには切り上がり長兵衛の異名を持つ坑夫が「伊予国（愛媛）西条藩赤石山南斜面に銅の大露頭が見える」との情報を持ってきたというのだ。

長兵衛は、以前、吉岡銅山で重右衛門の下で働いていたが、今は西条藩の長谷坑で働いていた。

「早速、重右衛門様と長兵衛たちは備後（広島）鞆の浦から伊予川之江に船で渡り、赤石山に分け入った。勿論、天領だから代官所や庄屋の了承は取り付けた上だ。なにせ三千尺とも四千尺とも言われる険しい山だ。地元の間人も入ったことがない。足を踏み外せば、そこは千尋の谷だ。生きては帰れん。もっとも重右衛門様は銅山を見つけるまでは帰らないという悲壮な決意だった。そしてついに見つけたのだ」

幸平は、まるで自らが深山に分け入り、崖をよじ登り、銅山を見つけたかのように目を閉じ、感激にしばらく言葉を詰まらせた。

「どうして長兵衛殿は住友にそんなよい知らせを持ってきたのでしょうか。その時は別の銅山でお働きになつていたのでしょ

梅子が、思わずといった風に無邪気に聞いた。

実は貞剛も同じ疑問を抱いていたのだ。

「おお、いいところに気付いてくれたの」幸平はさも得意げな笑みを浮かべた。「その疑問は当然だ。長兵衛によると、いろいろなお山を渡り歩いてきたが、住友ほど坑夫を大切にしてくれるところはなかった。だから何としても住友にこの情報を伝えたかったのだ。ありがたいではないか。これも皆、文殊院様の教えを守つてきたからだ」

住友には、初代文殊院政友が商売の道を説いた、五か条の文殊院しいがき旨意書というものが伝わっている。

文殊院は、商売は言うに及ばず、どんなことでも心を込めて励むようにと教えている。

幸平は、住友が人を大事にし、心を込めて商売をしてきたから長兵衛が情報をもたらしてくれたのだと言っているのだ。

「人を大切にするというのは良いことなのですね」

梅子が納得したように言った。

「その通りです。何事も人があつてこそ始まります。また人という言葉は、昔から人が支え合っている姿を表現していると言われています

すよ。夫婦も人として支え合わねばなりませんぞ」

宰平が梅子に諭すように言う。

「はっ」

梅子が小声で返事をする。

「別子は、神の山と言うべき最高の銅山だった。これが住友発展の基になったのだが、ご一新の世になって、実は新政府に接收されそうになった。このことは存じておろう」

宰平が、身を乗りだすようにして貞剛に言った。

「別子銅山は、幕府から住友が採掘を委託されているものである。当然、新政府の所有にするというのでありますな。銅は政府にとっても重要な産業ですから」

貞剛は答えた。

宰平は大きく頷いた。「その通りだ。私は別子銅山の支配人として引き続き銅山経営を住友に任せるべきだと政府に必死で陳情した。

これには我が実家、北脇家が公家に仕える漢学者の家であったことが大いに役立った。なんとか伝手を見つけ、岩倉具視様にもお願いして、引き続き住友が別子を経営していいことになった。ところがじゃ」今度は宰平の顔が歪んだ。

「どうされましたか」

「情けないことに本店の重役の方々が、別子を売った方がいいと言



うんだ。これには情けないと思い、私は怒った。別子を売ったら、住友はどうなるとお思いかと迫って、これも食い止めた。その時、政府から鉱山司の役人になるように命じられたのだ。生野銀山などを視察する機会に恵まれ、そこで黒色火薬を使う西洋の鉱山技術を目の当たりにした」

幸平は鉱山司付属試補となり、鉱山司に出仕したのだが、その際の鉱山視察で鉱山技術の近代化に目覚めた。

「それは驚いたなどと簡単に言えるものではなかった。驚きを超え、驚愕きょうがくと言うべきものだった。鑿たがねや鎚つちでコツコツと掘るのではなく、

一気に掘ってしまうんだからな。私はこれだ！ と思ったのだ」

「それでラロックを呼んだのですね」

貞剛も心が弾んだ。幸平の喜びがびびしと胸に伝わってくる。

ふと、羨ましいという気が起きてきた。今の自分は、幸平ほど仕事に喜びを抱いているだろうか。

「ラロックはようやってくれた。一年半かけて別子銅山もくろみ目論見書を提出してくれた。これは別子を西洋に負けぬお山にする知恵が詰まっている。それだけではない。塩野門之助しおの もんのすけという、その時に通訳をしてくれた者をフランスに勉強に出した」

「ラロックはどうしたのですか？」

「残念だが、辞めてもらった」

「辞めさせたのですか」

貞剛は驚いた。

「いかんせん、外国人は高すぎる。ラロックの目論見書によるとお山を近代化するのに六十七万円以上もかかる。お山の利益の七年分だ。そのうちの二割の十四万円が外国人の給料だ。これだけの金があれば、もっと近代化の設備投資ができる。だから日本人の手で近代化をする。いつまでも外国人の力に頼っているようではいかなのだ。私が鉦山司に出仕していた際の上司は、長州出身の井上勝鉦山かみ正というお方だった。まだお若い方だったが、幕末にイギリスに命懸けで密航して、西洋の鉦山や鉄道技術を学んでこられた方だ。この方は日本中に鉄道を敷設ふせつしたいという大きな夢をお持ちだが、おっしゃっていたことがある。日本人の手で技術を蓄え、日本人の手で鉦山を採掘したり、列車を走らせるようにならねば、西洋に勝つことはできない。いつまでも外国人に頼るようではいけないとな。その通りだと思った。だから非情のようだが、ラロックには帰国してもらった。ラロックは、別子で働きたいと無念そうだったが、仕方がない」

幸平はきっぱりと言った。

貞剛は、経営者として、なるべき時に非情になることができる幸平を尊敬の目で見つめた。

自分は果たしてどうであろうか。罪人を捕まえ、裁く立場の司法官でありながら、どこか非情になり切れない甘さがある。人に対する思い入れが深すぎるところがあるのだろう。

これは経営者として不向きな資質ではないか。経営者は、宰平のように、時に非情でなければならぬ……。

「別子のお山の産銅高は、ご一新の時は、七十万斤（約四二〇トン）だったが、今では百三十万斤（約七八〇トン）にもなっている。銅は国家の要だ。ますます重要になっている。鉱山の近代化が成功すれば、この数字は飛躍的に上昇する。私は、お山で働く者たちにも月給制を採用したり、真面目に働けば等級が上がるようにしたり、多くの者がちゃんとした生活ができるようにもしたい。お山は住友家だけのものではない。お山は、そこで働くみんなのものなんだ」

宰平は、やにわに貞剛の手を握った。貞剛は、突然のことに目を大きく見開いた。その手は熱く、血が脈打っているのが感じられるようだった。

「なあ、貞剛。住友に來い。何度も言ったことだが、お国に尽くすのは官の道ばかりではない。住友はお国のためにどれだけ役に立っているか分からんぞ。血を分けた貞剛が、私の右腕になってくれれば、どれだけ心強いことか。頼む」

宰平は頭を下げた。

「叔父さん……」

貞剛は、あまりに真剣な幸平の姿に心を強く動かされたが、返事に窮していた。

隣に座る梅子を見つめた。梅子は、貞剛と視線を合わせ、穏やかに微笑んでいるだけだった。

6

貞剛は、一八七七年（明治十年）九月、大阪上等裁判所判事に命じられた。しかし翌一八七八年（明治十一年）の暮れ、貞剛は、一身上の理由という名目で辞表を提出した。それは受理され、一八七九年（明治十二年）一月二十三日付けで免官となった。

そして同年二月一日、貞剛は住友に入社したのである。

貞剛の入社辞令書には、重任局を申し付けるということが記載されていた。月給は四十円だった。

「あらら、あなた給料が半分以下になりましたわよ」

梅子はそれをまじまじと見つめ、深くため息をついた。

その時、梅子は一男一女の母となっていたのである。

〈つづく〉